

## ルソー事件ノート : 「市民の意見」について

永田, 英一

<https://doi.org/10.15017/2332753>

---

出版情報 : 文學研究. 71, pp.105-128, 1974-03-25. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

## ルソー事件ノート

—「市民の意見」について—

永 田 英 一

一七六二年六月、ジュネーヴ当局によるルソー<sup>①</sup>断罪を契機として起った所謂「ルソー事件」は、あまりに複雑な諸要素が混淆しているために、その事実関係を究明することは、多くの研究者の努力にもかかわらず、いまだに困難な課題となっている。けれども、われわれはまずこの事件の中に二つの基本的な対立関係を認めることができる。すなわち「ルソー対ジュネーヴ当局」と「ルソー対ヴォルテール<sup>②</sup>」の敵対関係であって、私はかねてからこれらの関係の交錯とそこに繰展げられる特異な人間ドラマに関心をもち続けてきた。——ここに取りあげた小冊子「市民の意見<sup>③</sup>」は、当時この事件をめぐる乱舞した、いわば怪文書の一つであって、作者はほかならぬヴォルテールその人とされている。

(1) Jean-Jacques Rousseau (1712—1778)

(2) Voltaire (1696—1778)

(3) *Le Sentiment des Citoyens*, Genève, 1764, 8 pages.

一七六二年六月九日、ルソーの『エミール』<sup>①</sup>はパリ高等法院によって焚書の刑に処せられ、作者に逮捕令が発せられた。次いで同六月十九日、ジュネーヴ小評議会はきわめて性急に『社会契約論』<sup>②</sup>と『エミール』を焼却し、作者が来れば逮捕するとの裁決を下した。この時ルソーはイヴェルドンの旧友ロガンのもとに身をよせていたが、ここでもベルヌ当局からの退去命令をうけ、かれは同年七月十日、ヌーシャテルのプロシア公領内の山村モティエに遁れた。そしてあとを追ってきたテレーズとともに表面静かな日々を過していたが、内心は甚だ穏やかでなく、祖国ジュネーヴの情勢に神経を失らせていた。

(1) *Emile, ou de l'Éducation* (1762)——この書は「すべてを自然宗教に引戻す意図において」のみ書かれ、作者はその教育草案において「犯罪的学説を展開することに専心している」として断罪された。

(2) *Du Contrat social ou Principes du Droit politique* (1762)——この書は「すべての政府、特にわが政府を破壊する諸原理」を含み、かつ『エミール』におけると同様、作者は「すべての啓示と奇蹟を茶化し、すべての宗教を完全な理論に還元せんと欲して、キリスト教を破壊するもの」として断罪された。

ジュネーヴでは、ルソー裁判の手續上の違法性について市民の間に不穩の動きがあった。これに対して検事総長ジャン・ロベール・トロンシャン<sup>①</sup>は『田園からの手紙』によって、その正当性を主張し、ルソーの宗教、道徳の論を反駁した。また牧師団はルソーを背教者として論難し、中にはジャコブ・ヴェルヌ<sup>②</sup>のように「サヴォワ助任司祭の信仰告白」の取消しを要求するものもあった。そしてルソー自身もジュネーヴの市民権を放棄したり、またかれを擁護する市民の側から次々と「抗議書」<sup>③</sup>が提出され、これを当局が拒否するに及んで、このカルヴァ

ンの町——福音主義改革宗教の本拠は、完全に二つの陣営に分裂したかと思われた。ジュネーヴ共和国の史上、第三の革命といわれる騒動である。

(1) Jean-Robert Tronchin, *Lettres écrites de la Campagne* (1763)

(2) Jacob Vernes (1728—1791)—— Cf. *Lettres sur le Christianisme de J.-J. Rousseau* (1763); *Dialogues sur le Christianisme* (1763), etc.

(3) ジュネーヴでは、政府当局に違法行為や権力乱用の事実があった場合、市民の側から「抗議書」*Représentation*の形で小評議会(元老院)、あるいは二百人会議に不服を訴える制度があった。これに対して当局は「拒否権」*Droit négatif*を發動して、何の理由説明もなく、市民の要求を拒否することができた。そこから「抗議派」*Représentants*と「拒否派」*Négatifs*の名称が生れた。

なお、ジュネーヴにはルソー事件以前にも、一七〇七年と一七三八年に二つの民衆蜂起の事件があり、いずれもベルヌ、テューリッヒ、フランスなどの外部勢力の介入によって鎮圧された。

こうしたジュネーヴの動勢の中で、とりわけルソーに衝撃を与えたのは検事総長トロンシャンの『田園からの手紙』であった。この書は疑いもなくジュネーヴ当局と「拒否派」の市民の意思表示ともいえるべきもので、その作者の権威と才能によって「抗議派」の市民は完全に圧倒され、これに対向しうる強力な反撃は、ルソーに期待するよりほかにないように思われた。ルソーとしても「この際……怯懦の感情に従うならば、人間の屑になる」と考え、また「宗教と自由と正義」を守るために、長文の弁駁書『山からの手紙』を書いた。そして努めて実証的に、歴史的に裁判の不当性を糾弾し、かつ繰返し自己の立場を弁明するとともに、一時はサヴォワのトノンまで

出向いて抗議派の首領達と会談するほどの熱意を示した。

(1) (2) 『山からの手紙』の序文

ルソーの『山からの手紙』<sup>3</sup>は例によってオランダで印刷され、一七六四年十二月十八日、ジュネーヴへ搬入された。そして翌々日「スイス人」ヴォルテールはその一部を入手し、同二十七日、匿名の小冊子「市民の意見」が発行されたのだが、その内容は左の通りである。

(1) *Letres écrites de la Montagne, Amsterdam, 1764.*

(2) ルソー派の市民は法に則って「この卑劣な中傷文書」を焼き捨てた。

\*

#### 市民の意見

『田園からの手紙』に続いて『山からの手紙』が到来した。以下は「町の意見」である。

人々は狂人を不憫に思う。けれども精神錯乱が狂暴になると、これを縛りつける。美德である寛容も、この場合は悪徳となるだろう。

われわれは、われわれの町の元市民ジャン・ジャック・ルソーに同情した。かれがパリにあってオペラで嘲笑をうけたり、コメディの舞台の上を四つ足で歩きながら、身を売らされる道化者のあわれな稼業に甘んじていた限り、われわれは同情したのであった。

けれども実をいえば、こうした恥辱は何らかの仕方であれわれの上に降りかかっていたのだ。パリに着くジュネーヴ人にとって、一人の同郷人の恥さらしのために、肩身のせまい思いをさせられるのは情けないことであつた。われわれのうちの若干の人々はかれに注意したが、改めさせられなかつた。われわれはかれの小説本を許したものの、そこには品位も羞恥心も、良識と同様に、ほとんど顧慮されてはいない。以前、われわれの町は淳良な風俗とわれわれのアカデミーへ外国人を惹きつけた堅実な著作物によつてしか知られていなかったのだ。わが市民の一人が、風俗を脅やかし、かつ紳士諸賢に軽蔑され、敬神者に批難される書物によつてこの町を有名にしたのはこれが初めてである。

かれが小説本に無宗教を混入した時、われわれの裁判官は余儀なくパリやベルヌの裁判官の例に倣わざるを得なかつた。パリの裁判官はかれを断罪し、ベルヌの当局者はかれを追放したのだ。しかしジュネーヴの評議會は、その裁きにおいて、なおも憐憫の情を禁じえず、祖国へ帰つて特赦をうけられるよう、迷える罪人の悔悟に扉を開いていたのである。

今日となつては、堪忍袋の緒は切れたのではないか。かれはあえて新しい誹毀文書を公にし、その中でキリスト教を、みづから信奉する改革宗教を、また聖福音のすべての伝道者と国家のあらゆる団体を烈しく侮辱しているのだ。精神錯乱も罪悪を犯させるに至つては、もはや弁解の役には立たないだろう。

今や「わたしの言行不一致と矛盾撞着によつて、わたしの脳の病いを認めて下さい」と、いくらいっても無駄であろう。かれがこの狂気からかれて、イエス・キリストを冒瀆し、「福音書は破廉恥で、不敵な、背教の書であり、そのモラルは子供達に自分の母親や兄弟を否認することを教えるものだ、など」と活字にするに至

ったことは、やはり真実であろう。その他の言辭をわたしは繰返し述べるまい。それは怖氣をふるわせるものだ。かれはそうした言辭を一人の抗弁者の口に託して、その恐しさをごまかすつもりなのだが、この假想の抗弁者に対して、かれは決して反論しないのだ。いまだ曾て、かくも破廉恥な抗弁をなし、そしてわれらが救世主の箴言の神聖な本来の意味をかくも邪まに歪曲するほどの無頼の徒がいたためしがない。「このように福音書を分析する極悪非道の魂を想像してみよう」とかれはつけ加える。ああ！一体誰がこのように分析したのか。この極悪非道の魂はどこにいるのか。ラ・メトリは『人間機械論』の中で、自分はある危険な無神論者と知合いになったと云って、その論説を反駁せずに述べているが、この無神論者が誰であったかは明らかだ。解毒劑を示さずに、このような毒物を見せびらかすのは、決して許されることではない。

ルソーはまさにこの箇所で、自分のために像を建てるべきだといった時と同じ謙虚さをもって、自分をイエス・キリストに比べている。人も知るように、こうした比較はかれの狂気の発作の一つである。しかし、これほどまでに神を冒瀆する狂気は、かれの他のさまざまな破廉恥行為を罰したと同じ手のほかに、別の医師をもちうるだろうか。

かれは自分の冒瀆的言辭を假空の密告者に背負わせて、例の晦渋な文章で、その弁解をしようと考えたが、われらが救世主の奇蹟について語るその方法には、いかなる弁明もありえないのだ。かれは明確に、自分自身の名で「福音書の中には、良識を捨てなければ文字通りに解することのできない奇蹟がある」と云っている。イエスが宗教を確立するために、なし給うた驚嘆すべき事蹟をことごとく茶化しているのだ。

われわれはまたここで、かれがキリスト教の根本の基礎を覆えしながら、みずからキリスト者と称する精神

錯乱を認める。しかしこの狂気はますますかれを罪人にするばかりである。キリスト者であり、しかもキリスト教を破壊せんと欲することは、単に冒瀆者の行為であるばかりか、裏切者の所業なのだ。

イエス・キリストを冒瀆した後、かれが聖福音の牧師達を侮辱するのは驚くにあたらない。

かれは牧師達のある信仰告白をチンブンカンブンの戯言、下等な言葉、また氣違いを意味する隠語と呼ぶ。かれは牧師達の宣言をラブレの弁論に喩えて「かれらはみずから信じることも、欲することも、また言うことも知りたくないのだ」という。

また他のところで「かれらは何を信じるのか、何を信じないのか、何を信じるように見せかけているのかも知りたくないのだ」といつている。

従って、かれは一片の証拠も、些かの口実もなくして、かれらをもっとも腹黒い偽善者だときめつけているのだ。かれの最初の背教を赦した人々、また、愚劣な小説の中にばらまかれたかれの冒瀆的言辭が刑の執行人に委ねられた時、その第二の背教の処罰にも何ら関与しなかった人々を、かれはこのように遇しているのだ。われわれの中に、かかる行動を冷静に考量して、この中傷者に対して憤激しない市民が一人でもあるだろうか。

われわれの町に生れた男にあって、これほどまでにわが牧師達を侮辱することが許されるだろうか。牧師達の大部分はわれわれの身内や友人であり、時にはわれわれの慰め手である。では何者が、かれらをこのように遇しているのか、を考えてみよう。それは学者連に対して討論する学者なのか。いや、一篇のオペラと口笛でやじられた二つの喜劇の作者なのだ。またそれは熱心のあまり血迷って、有徳の士に不遜な非難をあげせる善



人なのか。われわれは苦痛をもって、かつ赤面しながら、それが今もっておのれの放蕩の忌わしい痕跡をもつ男であることを認めるのだ。そしてその男は大道芸人に身をやつし、村から村へ、山から山へと不幸な女を引廻しているが、かれはその女の母親を殺し、その子供達を病院の門口に捨てたのだ。かれは、ある慈悲深い人が子供の世話をしようというのを拒んで、そして名誉と宗教の感情と同様に、自然のあらゆる感情をかなぐり捨てたのだ。

というわけで、これがわれわれの同市民達にあえて忠言を与える男なのだ（われわれはやがていかなる忠言であるかを見るであろう）！これが社会の義務を語る男なのだ！

たしかに、かれはこの義務を果していない。かれは同じ誹毀文書の中で、ある友人の信頼を裏切り、その手紙の一つを印刷させて、三人の牧師を互いに仲違いさせようとしているのだ。ここに至って、ヨーロッパのある一流人物とともに、教育小説の著者であるこの同じ作家について、若者を育てるためには、まずみずから良く育てられていなければならぬと言うことができる。

特にわれわれに関わる問題、われわれの町の問題に移ろう。かれはここでまた裁判にかけられたために、この町を顛覆させようとしているのだ。いかなる精神で、かれはわれわれの鎮まった騒動を再び呼び戻すのか。何故かれはわれわれの古い争いを喚びさまし、われわれの災禍について語るのか。バリやジュネーヴで一篇の駄作が焼かれたからといって、われわれが互いに殺し合うことを欲するのか。われわれの自由と権利が危険に瀕する時には、われわれはかれがいなくとも、十分にこれを擁護するであろう。もはやわれわれの同市民でもない、あのような男がわれわれに向って、こういうのは滑稽である。――

「諸君はスパルタ人でも、アテネ人でもない。諸君は商人、職人であり、私利私欲に汲々たる町人なのだ」と。われわれはフィリップ二世やサヴォワ公に抵抗した時、まさしく古代人であった。われわれはわれわれの勇氣と血の代償によってわれらの自由を獲得したのだ。そして同じくわれわれはこれを保持するであろう。

われわれを奴隷と呼ぶのはやめて貰いたい。われわれは決してそうはならないだろう。かれはわが共和国の高官達を専制者呼ばわりするが、主要な人々はわれわれ自身によって選ばれたものだ。「従来、二百人会議には、ほとんど明識がなく、まして勇氣などは見られなかった」とかれはいう。嘘八百を並べて、かれは小評議會に対して二百人会議をそそのかし、これら二つの団体に対して牧師達を、そしてついには皆に対して皆をけしかけて、われわれを隣国人の輕蔑と嘲笑にさらそうと努めているのだ。かれはわれわれを侮辱することによって、われわれを煽動しようとするのか。かれは公然とみずから信奉するキリスト教を打倒そうとしているが、同じくわが憲法を歪曲して、これを破壊しよう欲しているのか。かれが攪乱しようとするこの町は、憤然としてこれを拒否する、と警告すれば足りる。『エミール』なる小説本のために、われわれが劍を抜くでも考えたのなら、そんな考えは、かれのさまざま滑稽や狂気沙汰の中に数えるがよい。しかし、不敬虔な小説家は軽く罰せられるが、卑劣な謀叛人は極刑をもって処断されるということをかれに知らさなければならぬ。

\*

見られる通り、この小冊子「市民の意見」はヴォルテール流の毒氣に満ちている。ルソーの言葉によれば「インクではなく、地獄の河の水で書かれたような告発状」(『告白』十二)である。とりわけ放蕩の忌わしい痕跡と

か、テレーズの母親を殺したとか、子供を捨てたとか——私行上の中傷や秘密の暴露はジャン・ジャックを逆上させるに十分であった。けれどもこの作者があまりに完全にジュネーヴの市民、特に聖職者になりすぎたためか、ルソーはこれを読んだ瞬間、牧師ヴェルヌの作だと判断した。そしてこの種の文書に対する最善の報復措置として、これをパリで印刷し、広くヨーロッパに公表することを考えつき、かれは、早速、出版者デュシェーヌに依頼の手紙を書いた。

「ジュネーヴで発行された小冊子を送ります。どうかこれをパリで印刷して市販して下さい。ジュネーヴでわたしに対して準備されている、もっと烈しい反駁文が出るまでに、両派の言い分を公衆に聞かせたいのです。これは聖福音の伝道者、セリニーの牧師ヴェルヌ氏の作です。わたしはすぐにかれの牧師らしい文章でそれと見抜きました。しかし、もしわたしが間違っておれば、事が分明するためには、ただ待つほかありません。というのは、もしかれが作者であれば、必ず名譽ある人間、良きキリスト者としての義務に則って、公然とこれを認めるでしょうし、また作者でなければ、同じくこれを否認するでしょう。そして公衆もやがて対応の仕方を知るでしょう……」(一七六五年一月六日付)

ルソーはまた特に「市民の意見」の中の若干の箇所について「註解」を作った。かれにとってもっとも重大なのは、私行上の中傷、告発である。

「わたしは簡単に、この条項が要求していると思われる意思表示をしたいと思う。作者がここで語っている病気で、大なり、小なり、わたしの身体を汚したものは曾て一つもない。わたしが悩まされている病気は、そ

うした病気とは何の関係もない。これはわたしに生れつきのもので、幼年時代にわたしの世話をしてくれた現存の人々が知っている通りである。……病気の時にわたしの看護をし、苦しんでいる時にわたしを慰めてくれる婦人は賢明で、多くの人々から尊敬されており、かの女が不幸なのは、ただ非常に不幸な男と運命を共にしているからだ。かの女の母親は現に元氣いっぱい、老齡にもかかわらず良好な健康状態にある。わたしは曾ていかなる病院の門口にも、また他のところにも、子供を捨てたことは決してないし、捨てさせたこともない。

言われているような慈悲深い人であったならば、こうした秘密を守る慈悲の心をもったであろう。また誰でも知っているように、わたしの行動について確実な情報が期待されるのは、ジュネーヴからではない。ジュネーヴには、わたしは生活したこともないし、そこからはわたしに対してあれほど多くの憎しみがばらまかれていたのだ。この一条については、わたしは何もつけ加えるまい。ただわたしとしては、人殺しは別だが、このような文章を書くよりも、作者がわたしに批難していることをした方がましだと思う\*。(註解三)

\* ルソーがテレーズとの間に生れた五人の子供を捨てたのは、病院(Hôpital)ではなく、孤児院(Hospice des Enfants-Trouvés)であった。といっても、これは甚だ苦しい言い遁れにすぎない。けれどもルソーとしては何よりも、この時の秘密を知ること少数の人々の裏切りを確認したのであった。

ルソーはまた今一つの「註解」として、祖国ジュネーヴに対する弁明をつけ加えている。

「わたしの行動の中には、わたしが祖国の平和を乱さないために払った苦しい犠牲を見ることができ。そ

してわたしの著作の中には、市民達がどんなに追いつめられても、決して祖国を乱さないよう勧告するため、わたしがいかに努力しているかが分るのだ。」(註解六)

パリの出版者デュシェーヌはルソーの申し出を快諾し、迅速に事を運んだ。そしてルソーの手紙を「序文」として、これらの「註解」を附した「市民の意見」のパリ版が発行されたのであったが、ルソーはたちまち牧師ヴェルヌから厳しい抗議の手紙を受取った。

「ヘルソー」と署名された手紙が印刷されました。わたしはその中で、「市民の意見」という題名の小冊子の作者であるかどうかを、何らかの方法で公然と言明するように要請されています。この手紙があなたの作だということには、わたしは大いに疑問をもっていますが、しかし、貴台よ、わたしは問題のパンフレットについて、若干の人々が抱いているらしい疑いそのものに非常に憤慨していますので、はっきりとあなたに宣言すべきだと思いました。わたしはこの破廉恥な文書には何ら関与していませんので、はつきりとあなたによそ紳士たるものが抱かせられる嫌悪の情を到るところで示したのです。わたしは『キリスト教』についてあなたと同様に考えていないことを、何の恨みも悪意もなしにあなたに申しましたが、あなたはそのために『山からの手紙』の中で、わたしに悪口雑言を浴びせました。けれどもわたしは、おそらくわたしを知らない人々がわたしのやりそうなことだと思つたような、そういう下劣な復讐によって自分を卑しめるようなことは致しません。……以上があなたに言明しなければならぬと思つたことです。そして今後、癩癩や怒りや悪意を含んでいるような、何か匿名の作が現われても、こちらからまた手紙を出してお騒がせしないため

に、それはわたしの自作ではない、と予め通告して置きます。」(一七六五年二月二日付)

これを読んで、ルソーは大いに困惑した。かれはこの時すでにパリ版「市民の意見」を受取っており、デュ・ペイルーやヴェルタン、ペール公など若干の知人に送附していただけに、一層この軽率が悔まれるのだった。そしてなおも半信半疑ながら「結局、自分にも思い違いはありうるから」と反省して、ヴェルヌへ返事を書き送った。

「今日二日付の貴翰を受取りました。これによってあなたは「市民の意見」という題名の作品を否認しておられます。わたしはわたしが依頼したこの作品の版を廃棄するようにパリへ手紙を書きました。もし何らかの方法であなたの否認を証明するのに役立つことができずならば、ただ御指示下されば結構です。」(同年二月四日付)

ルソーがパリへ書いた手紙というのは、もちろんデュ・シェーヌ宛のものである。

「ヴェルヌ氏が手紙をよこして、わたしの懇請によってあなたが印刷した作品を猛然と否認して来ました。わたしはその返事に、かれの否認を言いひろめ、そしてわたしが依頼したこの作品の版を廃棄させるといつてやりました。どうか、あなたの手の届くところで、わたしが約束を守るようにして下さい。この手紙をお受取りになったら、もうあなたの手からは、この印刷物の一部も出ないようお願いします。」(同年二月五日付)

けれどもデュシェーヌは、これより先に、急いでこのバリ版「市民の意見」を破棄していったのだ<sup>(2)</sup>。そしてルソー自身も同年三月「ヴェルヌ氏に関する声明」<sup>(3)</sup>の中で、改めて自分の非を認め、この問題には一応終止符が打たれた。

(1) デュシェーヌはすでにこれを破棄していた。というのは、ルソーは一月二十日付デュシェーヌ宛の手紙の中で「わたしがこの小冊子を忘却の中から引出さないように欲する人がある。……決して公刊されないように願う」と書いているし、またデュシェーヌも一月二十六日付ルソー宛の手紙で「直ちにヴェルヌ氏の小冊子を破棄しました。これを少数数印刷したのは、ただあなたが絶対的に命令したからです」と記している。けれどもこの版は五十部ほど出廻り、ルソーも十二部受取って「この作品が出る前に破棄して下さればよかったのに」といつている。(二月三日付)

なお、この版のタイトルはルソーの指示によって次のように印刷された。

— Réponse aux Lettres écrites de la Montagne, publiée à Genève sous ce titre : *Sentiment des Citoyens*, 1765 (22 pages in-8°)

(2) *Déclaration relative à M. Vernes* (1790) — デュ・ペイローの忠告により、当時これは印刷には附されなかった。

\*

「市民の意見」の作者が果して牧師ヴェルヌでなければ、一体誰なのか。——ルソーはバリ在住のジュネーヴ人、ルニエップスに宛てた二月十日付の手紙の中で、《異端審問者ヴォルテール》の策動について「かれはわたしを追及し、わたしを圧しつぶし、わたしを迫害して、ついにはわたしに非業の最期をとげさせるだろう」といつて、「ヴェルヌの衣の下にもっと悪い何者かが隠れている」との憶測を述べている。そして「あわれな市民達」もすべて当局の膝下に屈して、動きのとれないのを見て「わたしはもうジュネーヴの事件には関わりたくな

いばかりか、その話も聞きたくない」と記している。また実際「市民の意見」の作者がヴォルテルだという噂も早くから流れており、かれはまったく嫌気がさして、抗議運動のために「火を吹く」役を断念した。そして結局また「孤独者ルソー」に帰るのだった。

「わたしとしては、自分に残された唯一の決心を取ります。しかも最終的なのです。かくも純粹な意図をもって、また正義と真実へのかくも多くの愛にもかかわらず、わたしは地上に悪のみをしたのですから、もうこれ以上悪をしたくありません。わたしはわたし自身の中へ隠退します。」(同年二月二十四日付ド・リュック宛)

一方、ヴォルテルはこの件については、あくまで頬かぶりをし、相変らず冗談を飛ばしていた。かれは一月十二日付ダミラヴィル宛の手紙の中で書いている。

「わたしは昨日お話しの小冊子をジュネーヴの町中に探させましたが、まだ見つけることができません。それはほんの薄っぺらな刷りもので、ほとんど生れると同時に忘れられたようですが、ヴェルヌとかヴェルネとかいう名の牧師の作だといわれています。この牧師はすでにジャン・ジャックに対して別の小冊子を書きました、やはり忘れられています。ありがたいことに、わたしはそのどちらの作も見ることがなく、ただ、この機会に作られたものもろの退屈な文書が出廻るのにまかせています。たしかに、こうした騒動には、ほんの少しでも関わり合うのは真つびらです。わたしは十年この方、ずっとわたしの田舎に留まっていますが、こんな愚劣な喧嘩に卷込まれずに、ここで死にたいと思っています。ルソーの名は醇風良俗にとつて幸いなものではありません。」



また三日後に同じグミラヴィルに宛てて、こうも書いています。

「ジャン・ジャックは、かれの祖国と紳士諸賢の間で憎悪の的になっています。……」

この騒動の間中、わたしはずっとフェルネーにいました。わたしは何も手出しをしていません。蜜蜂の群が巢の中で争っている時には、それに近づいてはいけません。万事うまく納まるでしょう。そしてあのヤクザなルノーはいつまでも善良な市民の呪咀となるでしょう。」

けれども《冗談の先生》が何といおうと、「市民の意見」の作者がヴォルテール自身であったことは間違いないと思われる。かれはルノーの『山からの手紙』がジュネーヴで発行された直後、評議会の有力者フランソワ・トロンシャン宛の手紙の中に、ルノーのこの著の中から抽出した十三項目の問題点の「抜萃」を同封して、「評議会がこれを検討することが肝要である」と進言しているが、そのうちの七項目は「市民の意見」の中にそのまま見出すことができる。また後年ヴォルテールの秘書ヴァニエールも、この件について正式に証言しているのである。

「下に署名せる私は、故ヴォルテール氏が、『山からの手紙』及びその他の作品においてルノー氏が言ったところの罵詈雑言に対して正当に憤慨し、「市民の意見」と題された小冊子によって、これに報復したことを宣言します。一七九〇年一月三日、フェルネー・ヴォルテールにて作成。」

(1) Lettre à François Tronchin, du 22 décembre 1764.

(2) Cité dans André Delattre, *Voltaire: Correspondance avec les Tronchin*, 1950, p. 639.

なお、その後出廻った「法律家の意見」*Sentiment des Jurisconsultes* や「予防策」*Préventif* などのパンフレットもヴォルテールの作とされている。

\*

さて、ヴォルテールは、この時期に、何故かかる破廉恥なパンフレットを公にしたのか。——われわれはまず、直接の動機として、ルソーの『山からの手紙』の中の若干の文節を指摘することができる。ルソーは同書「第五の手紙」の中で、ヴォルテールの口を借りてジュネーヴの敵共を戒めているのだが、その文中にヴォルテールのある秘密文書の名を暴露したのであった。

「これらの諸君は非常にしばしばヴォルテール氏に会っているが、どうしてヴォルテールは絶えずみずから説法し、また時にはみずから必要とする、あの寛容の精神をかれらに鼓吹しなかつたのだろうか。この事件において、もしかれらが少しでもヴォルテール氏の意見を徹したならば、氏はおよそ次のように語つただらうと思われる。

諸君、害悪をなすのは決して理論家ではない。それは偽善者なのだ。哲学はおのが道を罷り通る。民衆は哲学を解せず、あるいはその語るにまかせて、民衆に対する哲学の侮蔑にお返しをする。理屈をならべることは、人間のあらゆる狂癖の中でもっとも害悪の少ないものだ。いや、時にはこうした狂癖に熱中する賢者さえ見かける。このわたしは理屈をいわない。それは本当だ。だが他の人々は理屈をならべる。そこからどんな害悪が生じるだろうか。見給え、斯々の作品を。これらの書物の中には冗談しかないではないか。要

するに、わたし自身は理屈をいわないが、わたしはもっと良いことをする。わたしはわたしの読者に議論をさせるのだ。わたしのユダヤ人に関する章を見給え。「五十人会の説教<sup>\*</sup>」の中で、もっと詳しく述べられた同じ章を見給え。そこには理論がある、あるいはそれに相当するものがあると思う。諸君もまたそこに「言い遁れ」は少しもなく、「バラバラの不謹慎な警句」以上の何かがあることを認めるだろう。……

「わたしはさういふ寛容を説いた！ 寛容を常に他人に求めてはならないし、また他人に対して決して用いないのもいけない。このあわれな男は神を信じているのだ。このことは見逃してやろう。かれは宗派をつくらないだろう。かれは退屈な男なのだ。理論家はすべてそうなのだ。われわれはこの男をわれわれの会食には加えるまい。その他のことは、どうでもよいではないか。もし退屈な書物がすべて焼かれるとすれば、諸方の図書館はどうなるだろう。また退屈な人間をすべて焼くとすれば、國中を火あぶりの薪の山にしなればならないだろう。そうだ、われわれに冗談をいわせる連中には理屈をならべさせておこう。人間も書物も焼くまい。そして平和に暮らそう。これがわたしの意見なのだ。」

察するに、以上のことをヴォルテール氏ならば、もっと調子よく述べたであろう。そしてそれはかれが与えた最悪の忠告ではなかったらうとわたしには思われる。」

\* *Sermon des Cinqante, 1749.* — この小冊子についてもヴォルテールはあくまで否認していたが、一七五一年頃フリードリッヒ大王や友人達の前で朗読していたといわれる。またその内容は——五十人の敬虔な紳士が毎週日曜日に集まって、毎回各自が交代で司会をつとめ、祈禱と説教をした後に会食をするという設定だが——「曾てキリスト教に対して作られたもっとも乱暴な文書」とヴォルテール自身もいつている。(同年一月九日付リュクサンブール夫人宛)

ヴォルテールならば、「もっと調子よく述べたであらう」これらの文言は、明らかにヴォルテール自身の口吻を真似たものだ。しかもその中に指摘された「五十人会の説教」は、長年ヴォルテールが極秘にしていた「哲学的」パンフレットであった。このことについてヴォルテールは、ジャン・ジャックに同情的なグランベール宛に書いている。

「山の中へ入ると早々、かれ(ルソー)は一書をなして、祖国に騒動を起しています。かれは当局に対して市民を煽動し、この書の中で、自分は聴聞もされずに断罪されたと不平を訴えています。かれはまたはつきりとわたしを「五十人会の説教」の作者だと公表しています。密告者と中傷者の役割を果しているのです。まったくおかしな哲学者です。」(同年一月九日付)

またルソーの保護者ともいべきリユクサンブル夫人宛の手紙の中にも、同様の文面が見られる。

「……この書の中で、かれがわたしに対してジュネーヴの評議會をけしかけていることを、誰が信じるでしょうか。かれはこの評議會が自分の著作を断罪して、わたしのものを断罪しないと不服を唱えています。まるでジュネーヴの評議會がわたしの審判者でもあるかのように。かれは被告人が他の被告人を告発するように、公然とわたしを告発しています。わたしが「五十人会の説教」と題された文書の作者だといっているのです。……」

夫人よ、あなたの庇護を自負する男が、こうして密告者と中傷者の役を演じているなんて、ありうることでしょうか。かくも罪深い、かくも卑怯な行為には、まったく弁解の余地がありません。」(同年一月九日付)

さらにこの翌日、ヴォルテールはダルジャンタル宛の手紙の中で「あのルソーの小猿め」が、こうして自分をジュネーヴの「茶番劇」に引込んだことへの怒りを述べている。

「不幸にして、かれはわたしをそこへ巻込みましたが、見当違いも甚だしい。かれは評議会に、わたしが『五十人会の説教』を作ったといっているのです。ああ、ジャン・ジャック、これは哲学者のすることではない。密告者であることは卑劣なことです。自分の同僚を告発し、かくも邪まに中傷することは憎むべきことです。」

\*

以上見てきたように、「ルソー事件」のこの局面では、中傷、告発、暴露などの背信行為において、両者はほぼ同罪であったといえる。またこれ以前には「演劇」について両者の間に確執があり、それが尾をひいていたのも事実である。けれどもこの時点では、より重大な別の理由が、少なくともヴォルテールの側にあつたことを見逃してはならない。——それは、この長老を総帥とするあの《哲学運動》からの、ルソーの決定的な離反である。

右のダルジャンタル宛の手紙の中でも「自分の同僚を告発し、かくも邪まに中傷すること云云」と述べているが、ヴォルテールとしては、なおもジャン・ジャックを盟友の一人とする考えを捨て切れず、ジュネーヴの断罪に際しても「ルソー氏の弁護をした」(前出リュクサンブール夫人宛)のであつた。にもかかわらず、今や密告者ルソーは哲学者から狂人へ、そしてついに「悪徳漢」になり下り、《哲学》に害毒を流していると見たのであつた。これについてヴォルテールはダランベール宛に書いている。

「あのヤクザなジャン・ジャックは大義名分に恐るべき害悪をなしました。これが悪徳漢になった最初の狂人です。……ジャン・ジャックは、判決文に自分の名が書込まれば、縛り首になっても有頂天になるでしょう。しかしわたしは、かれがいなくとも大義名分は十分に支持されると思います。……人が何といおうと、およそ三十年來、理性がめざましい進歩をとげたことを認めなければなりません。それは日に日に発展するでしょう。」(同年一月十五日付)

しかもこの時期は、哲学運動にとって、いかなる時期であったか。——ヴォルテールの見るところでは、

「ああ、かれは、哲学を忌むべきものにするために、いかなる時機を選んだでしょうか。哲学がまさに勝利を収めんとしていたその時機なのです。実際、哲学者と称していた男による、こうした哲学に対する攻撃は、すべてわたしを絶望させます。」(同年一月十八日付ダミラヴィル宛)

ダランベールもまた、ルソーに好意をよせながらも、このことを嘆いている。

「哲学と文学のために、ジャン・ジャックが取った立場を残念に思います。……哲学がまさにトロヤを攻略せんとしている時に、哲学の陣営に不和のあるのは、まことに遺憾なことです。」(同年一月十七日付ヴォルテール宛)

われらが哲学闘争において、かくも重大な時期に、恥知らずのジャン・ジャックが完全に「同盟結社のユダ」

となり、あえて大義に挑戦していると見たのであろう。ヴォルテールのルソー迫害の動機には、いわば公憤の感情が交っていたことは否めないと思われる。そしてなおもこの《異端審問者》はルソー追及の手をゆるめず、パリの要人やジュネーヴの有力筋へ「かれはディオゲネスの衣の下に極悪人の魂を隠している」と告発する。……

\* Lettre à François Tronchin, du 22 janvier 1765.

他方、ルソーの側にも、相応の理由のあったことはいうまでもない。かれもまた自己の信念に基づいて大義名分のために——宗教と自由と正義と真実のために闘っていたのだから……。

そしてわれわれとしては、所詮、両者の対立抗争の中には、氷炭相容れぬ宿命を見るほかないのだが、これについて想起されるのは『ジュネーヴ人・ジャン・ジャック・ルソー』の著者ガスパール・ヴァレットの言葉である。

「道徳意識、道徳感覚、道徳的誠実さ、何事もまじめに、ほとんど悲劇的に考える習慣、犯した過誤をきびしく自責する欲求、……こうしたプロテスタン教育のすべての成果がルソーには常に見られるのだ。そしてこれほど根本的にパリジャン・ヴォルテールの皮肉で、軽薄で、冷笑的な道徳的懷疑主義とかれを区別するものは何もない。」<sup>(1)</sup>

そもそもこれらの言葉が些かジュネーヴ寄りにすぎると思われるならば、われわれはさらにわれわれに親しい二人のフランス作家の言句を引用しよう。

「共和国と神——この二重の愛、この二重の信仰、かれ（ルソー）はこれをジュネーヴの乳房で吸ったのだ。そしてそれがかれの血を造った乳液なのだ。パリで、かれが同時代のすべてのフランス作家から傑出しているのは、そこからなのだ。」（ロマン・ローラン）

「かれ（ヴォルテール）は特別にフランス的で、他国の空の下では、いや、わたしはあえていおう、パリ以外の空の下では、理解不可能であることをわれわれは認め、かつ宣言しなければならぬ。」（ポール・ヴァレリー）

そういえば、ジャン・ジャック自身も、つとにこの本質的相異を感得していたのだった。かれは前述のパリ版「市民の意見」に附した「註解」の一つに、「この冊子の作者と自分とは同じ宗教をもっていないし、また同じ教育も受けていないことを万人が認めるだろうと思う」（註解七）と記している。

- (1) Gaspard Vallette, *Jean-Jacques Rousseau genevois*, Paris-Genève, 1911, p. 448.
- (2) *Les pages immortelles de Jean-Jacques Rousseau*, choisies et expliquées par R. Rolland, Paris, p. 12-13.
- (3) Paul Valéry, *Morceaux choisis, prose et poésie*, Paris, p. 332.

ルソーとヴォルテールは共に基本的信条として、自然法と人間性を尊重し、狂信と不寛容を憎悪した。その点両者はいわば兄弟であり、同憂の士であった。にもかかわらず、こうした根原的乖離から、両者は終生敵対の運



命を背負わされた——と見るのも、たしかに一つの妥当な観点であらう。

いずれにせよ、この「ルソー事件」の局面において、両者の関係は、シェネーヴ当局を交えた三つ巴の葛藤の中に、決定的な段階に入った。そしてそこに展開される生々しい人間ドラマは、まさに文学の世界であるといわねばならぬ。

## 後記

\* 本稿のために使用した主要テクナストは次の諸版である。

— *Oeuvres complètes de J.-J. Rousseau*, Bibliothèque de la Pléiade, I, III, 1959-1964.

— *Lettres écrites de la Montagne*, éd. Henri Guillemin, Neuchâtel, 1962.

— *Correspondance générale de J.-J. Rousseau*, éd. Dufour-Plan, XII, Paris, 1929.

— *Voltaire, Mélanges*, Bibliothèque de la Pléiade, 1965.

— *Voltaire's Correspondence*, éd. Th. Besterman, VII, Genève, 1960.

\* 文中に固有名詞の原語表記を省略したが、左に主要なものを記す。

ロガン Roguin, テレーズ Thérèse Levasseur, ラ・メトリ La Mettrie, デュシヨース Duchesne, マド・ペイ  
ルー Du Peyrou, ヴュルタンベル Wurltemberg, ルニョップス Lenieps, ダミラヴァイル Damilaville, ヴォルネ  
Vernet, ヴァニエール Wagnière, フォルネー・ヴォルテール Ferney-Voltaire, リマクサンプール夫人 Madame de  
Luxembourg, ダランシーヌ d'Alembert, ダンジャンタル d'Argental.